【論　文】

若きヴァレスにおける≪反抗≫の形成

――アイデンティティを求めて――

島田尚一

ぼくは二十歳だった。それが人の一生でいちばん美しい年齢だなどと、だれにもいわせまい。

――ポール・ニザン

はじめに

パリ・コミューンの敗北後ロンドンに亡命していたジュール・ヴァレスが、長篇自伝小説『ジャック・ヴァントラス』(Jacques Vingtras)三部作の第一部『子供』(L'Enfant)を刊行したのは、ちょうど今から百年前にあたる一八七九年のことだが、いち早くその真価を見抜いたのはゾラであった。彼は「ル・ヴォルテール」紙に寄せた書評[1]のなかで、「私にとって、これはとりわけ真実の書、正確無比にして悲痛この上ない人間記録からなる書物である」と

述べ、「さまざまなエピソードはすみずみまで完璧であって、まことにみごとな観察の深さと分析の精緻さを備えている。そして、一気に描かれ、ただの一語で永久に定着された人物像の、なんと多いことか！」と激賞した。ただ、おどけたページの混在と過度の作者介入を玉に瑕として批判している点、いかにも自然主義作家らしい見方といえよう。なお、最後に作者の政治活動への深入りを戒め、「ジュール・ヴァレス氏ほどの偉大な小説家は、万人の目にとまるのに、ただじっと立っているだけで充分なのだ」と結んでいる事実も、つけ加えておかなければなるまい。

いまひとり、ヴァレスの「パラドクサルな」才能を賞賛してやまなかった同時代人がいる。いささか意外の感をあたえるかもしれないが、ほかならぬ詩人ヴェルレーヌである。彼はヴァレスを、フローベール、ゾラ、ゴンクール兄弟らとともに「最高の散文家」の列に加え、「私はヴァレスが大好きだ。ときとして耐えがたい悪ふざけや、彼が読者の顔面にぶっ放つピストルの射撃にもかかわらず、彼はやさしく、非常に繊細な人だと思う」[2]と書いている。ヴァレスの人と文学の本質を衝いた鋭い洞察といわなければならない。

資質的にも流派的にもいわば対極に位置するこの同時代の二大作家の烱眼にもかかわらず、後世は不当にも、小説家ヴァレスにたいしてきわめて冷淡であった。彼の死の直後になされた、断罪ともいえるブリュヌチエールの酷評[3]以来、彼は公式の文学史からは完全に無視されてきた。あるいは、せいぜいのところ、「レアリスム」の余白のごく小さな位置に甘んじてきた。そこに、ヴァレス文学がひめる毒にたいする体制側の強い警戒心を読みとる評家がいたとしても、あながち根拠のない邪推とばかりはいえないであろう。

他方、いわゆる労働者作家ではないという理由から、ヴァレスはプロレタリア文学史のなかにもしかるべき場所をあたえられていない。[4]その意味で、彼は二重に不運な作家であった。

だが、たとえば彼の『子供』に偏見なしに接する現代の読者は、そこに同時代のあの『にんじん』との類似性を感じるよりも、むしろルイ＝フェルディナン・セリーヌの『なしくずしの死』にも似た強烈な衝撃を受けるのではなかろうか。また、ひとしくパリ・コミューン体験者による記録でありながら、ヴァレスの『暴動者』(L'Insurgé,1886)には、リサガレーの客観的・俯瞰的な叙述ともルイーズ・ミシェルの回想録風なそれとも異なる、まぎれもなく文学的なエクリチュールが見出せるのではあるまいか。事実、モーリス・ナドーはヴァレスを「現代の作家」として論じた[5]し、アラゴンはスタンダールの光に照らして、ジャック・ヴァントラスのなかに平民反抗児ジュリアン・ソレルの後継者をみた[6]。ヴァレス復権の気運もようやく高まってきたといえそうである。

『ジャック・ヴァントラス』三部作は、『子供』が「学校では死ぬほど退屈し　家庭では泣かされ　育ちざかりをずっと　教師たちに虐げられ　親たちに殴りつけられた　すべての人々」に、『大学入学資格者』(Le Bachelier, 1881)が「ギリシア語とラテン語ではぐくまれて　餓死した人々」に、そして『暴動者』が「社会の不正の犠牲者として　ゆがめられた世界にたいして武器をとり　コミューンの旗のもとに　苦悩の大連合を結成した　すべての人々」に、それぞれ捧げられている。これらの献辞が端的に示すように、ヴァレスの思想と行動をつらぬく基本的姿勢は、家庭であれ学校であれ社会であれ、およそ弱者を虐げ抑圧するあらゆる圧制、あらゆる権威にたいする徹底した≪反抗≫の姿勢である。本稿では、後年ヴァレス自身が「監禁者の生活」とか「私の奴隷生活」とか名づけることになる幼少期の諸体験のなかに、そうした≪反抗≫の形成過程をさぐってみたい。

三部作のほかに、ヴァレスの自伝的作品としては『ジュニュスの手紙』(Lettre de Junius, 1861)、『冷笑家の遺

書』(Le Testament d'un Blagueur, 1869)、『貧乏人の候補者』(Le Candidat des Pauvres, 1879-80)、『貧乏学生の思い出——真実の手記』(Souvenirs d'un Étudiant pauvre——Mémoires vrais, 1884) がある。これらすべてのなかで、フィリップ・ルジュンヌのいう「自伝契約」が厳密に成立するのは最後のものだけであり、[7] しかも最初の二作品以外はすべてパリ・コミューン体験の濾過を経ているから、これらの諸作品を伝記的資料として扱う場合、よほど慎重でなければならぬことはいうまでもない。けれども一方、三部作をヴァレスの精神史としてとらえることが可能である以上、伝記的事実の細部は別として、ジャック・ヴァントラス=ジュール・ヴァレスの等式は充分に成立するはずである。以下、われわれはこの等式に則って論をすすめていくことにする。

テクストとしては、Œuvres Complètes de Jules Vallès *publiées sous la direction de Lucien Scheler* (Les Éditeurs Français Réunis——以下 E. F. R. と略記) およびロジェ・ベレ校注のプレイアード版(既刊は現在のところ第一巻だけなので、引用ページを示す場合は Pléiade とのみ記す)を用いた。なお、三部作中、『子供』と『暴動者』は『パリ・コミューン——ジャック・ヴァントラースの生涯——』という邦題で谷長茂氏による翻訳が出ており(中央公論社刊「世界の文学」25)、引用にさいしては原則としてこれを使用させていただいたが、多少表現を変えた箇所もあることをお断りしておきたい。

注

(1) Émile Zola : Œuvres complètes (Cercle du Livre Précieux), t. 12, pp. 589–593.
(2) Paul Verlaine : Œuvres en prose complètes (Pléiade), p. 1037.
(3) La Revue des Deux Mondes, le 1er mars 1885.
(4) たとえば Michel Ragon : Histoire de la littérature prolétarienne en France (Albin Michel, 1974) を参照。
(5) Maurice Nadeau : Littérature présente (Corrêa, 1952), pp. 64–68.
(6) Aragon : La lumière de Stendhal (Denoël, 1954), pp. 17–18.
(7) Philippe Lejeune : Techniques de narration dans le récit d'enfance *in* Colloque Jules Vallès (Presses Universitaires de Lyon, 1976), p. 52. なお「自伝契約」の概念規定については、Philippe Lejeune : Le pacte autobiographique (Seuil, 1975), pp.13–46. および中川久定『自伝の文学』(岩波新書)、一〇—一九ページを参照。

一、家庭の圧制

ヴァレスの心に深い外傷を残すことになる幼少期の原体験をさぐるうえで、『ジュニユスの手紙』(1)はわれわれに恰好の手がかりをあたえてくれる。これは「ル・フィガロ」誌の編集長ヴィルメッサンが企画し、アルフォンス・デュシェーヌ、シャルル・モンスレ、オーレリアン・ショル、バルベー・ドールヴィリーらが匿名で執筆したシリーズ物の一篇で、ここでヴァレスは「私の伝記を提供し、幼少期は人生でいちばん美しい時期だという、世間に流布している古い文句を、鏡を用いて攻撃する」として、自伝の素描を試みているのだが、そこにはすでに、のちのヴァレスの世界を構成することになる三つの重要なモメントが、図式的ではあるが、それだけにかえって明確なかたちで提示さ

れている。両親との深刻な葛藤、コレージュへの呪詛、および二月革命の体験がそれである。ごく短いものながら、この『ジュニユスの手紙』はその意味で、ヴァレス的世界の原型と呼ぶことができるであろう。

まず、第一のモメントからみていこう。

私は、子供ぎらいの叔母の手で育てられた、もっとも服装の粗末な子供だった。生来、粗野な美徳の持主だった〔……〕彼女は、しょっちゅう、自分では察することのできぬ微妙な子供心を傷つけるのだった。〔……〕子供を甘やかしてはならぬというので、菓子も玩具も愛撫もあたえられたためしがない！〔……〕

叔父はといえば、冷たい男で、〔……〕そのまなざしは私を恐れさせた。彼は書物の犠牲者だった。〔……〕彼は古代風の家長（pater familias）たらんとしていた。

「子供を甘やかしてはならぬ」云々という表現は、『子供』の冒頭に出てくるし、「書物の犠牲者」という言葉が教師であることを暗示しているとすれば、この叔父・叔母はジャック・ヴァントラスの両親像と重なり、ここに、粗野な母親と権威主義的な父親の圧制に苦しむ子供という基本的構図ができあがる。

『冷笑家の遺書』になると、母親による鞭打ちやバランドロー嬢のことを記した冒頭の一節は、ほぼ『子供』の冒頭の文章そのままだし、従姉ポロニーの登場その他いろんなエピソードによる肉付けがほどこされて、内容的にも文体的にもかなり『子供』に近い形になってきているが、ここでは、親子の葛藤、ひいてはヴァレスの《反抗》に深く

かかわるものとして、「私は靴直し（savetier）になりたかった」という表現が初出することを指摘するにとどめ、[2]以下、完成された作品『子供』のなかにこの葛藤の具体的な姿をさぐり、その意味を考えてみたい。

私は母親の手で育てられたのだろうか。それとも、乳を飲ませてくれた百姓女がいるのだろうか。いっさいわからない。私のかじりついた乳房がだれのものであろうと、私には小さかったころにかわいがられた覚えがない。〔……〕鞭でしこたまぶたれただけだった。

〔……〕

こういうわけで、私の最初の記憶はお尻をぶたれたことから始まり、そのつぎは驚きと涙にあふれたものになっている。

〔……〕

父は小刀を手にして樅の木ぎれを切っている。〔……〕父は生木細工で、私のために四輪馬車を作ってくれているのだ。〔……〕馬車はもうひと息で完成しようとしている。私はすっかり感動し、目を大きく見はっていた。そのとき、父はあっという叫び声をたて、血まみれの手を上げた。指に小刀を突きさしたのだ。私はまっ青になって父のほうへ駆けよる。とたんに、ひどく殴られて私の足がとまる。殴りつけたのは母だった。〔……〕

「お父さんが怪我したのはおまえのせいだよ！」

〔……〕

私は五歳ぐらいだったが、自分を親殺しのように思った。[3]（傍点引用者）

この冒頭の一節が予告するように、『子供』には、主人公のエディプス体験の解明を可能にする精神分析的要素が、豊富に含まれている。そういえば、この作品が「母」と題する章で始まり、「分娩」をも意味する《La délivrance》と題する章で終わっているのも、なかなか暗示的だ。

クロード・ビュルジュランはこうした点に着目し、マルト・ロベールの「家族小説」の概念[4]を援用して、主人公の幼児期の無意識的葛藤に照明をあてた[5]。彼は、主人公の出生への固執から、この小説を「私生児物語」と規定し、ヴァレス的世界の主要な構成要素――たとえば尻への鞭打ち、手仕事への異常な嗜好、衣服への偏執などにフロイト的解釈を加えている。個々の解釈の当否について半可通の判断は慎みたいし、幼児期の無意識的体験からヴァレスの《反抗》のすべてが説明できるとも思わないが（ビュルジュラン自身、そうした意図はもっていない）、この特異なパーソナリティ形成の起点にその種の強烈なエディプス体験を推測してみることは、充分に可能であるばかりか、後年のヴァレス像の理解のために、ひとつの重要な鍵を提供することになるのは確かであろう。

さて、意識の領域では、ヴァレスは両親といかなる葛藤を演ずることになるのだろうか。両親はなぜ彼を虐待するのか。というより、両親による教育や躾をなぜ彼は虐待と感じるのか。

私はよく喪服を着せられたが、〔……〕シルクハットをかぶれば、それはちゃんとした燕尾服でありフロック・コートなのだ。〔……〕

ところが、ズボンもこの布地で仕立てられており、この布には湿り気がなく、ごわごわしているので、私の皮膚はすりむけ、あちこち血だらけになる。

〔……〕

子供らしい遊びはすべて禁じられているようなものだ。棒遊びも、跳びはねることも、走ることも、格闘することもできない。〔……〕こうして私は生まれ故郷の町なかで、十二歳という年で、このズボンのなかに隔離され、亡命者の重苦しい悩みを味わわされたのだった。(6)

ヴァレスのイメージ体系のなかで衣服はきわめて重要な位置を占めており、ロジェ・ベレはこれを「衣服の神話」(mythologie du vêtement)とさえ名づけているが、(7)そこで「フロック・コート」(redingote)がブルジョアを、「仕事着」(blouse)が労働者をそれぞれ表わしていることを考えると、右の一節はまことに象徴的であるといわなければならない。肌になじまぬフロック・コートのなかに閉じこめられて血まみれになるこの小さな「亡命者」の肉体的苦痛は、そのまま、両親からブルジョア的生活様式の鋳型にはめられた少年の精神的苦悩にほかならないのである。しかもこの両親は、のちにヴァレスが「成り上がり者」と呼ぶことになるように、(8)生来のブルジョアではなかった。

私の父は農夫の子だったが、その農夫は思いあがって、息子が聖職者になるように勉強することを望んだ。この息子はラテン語を学ぶために、司祭の叔父の家にあずけられ、ついで神学校へ送られた。

父――私の父になるはずの人――はそこにとどまらず、大学入学資格者となって栄職につこうと望んだ。彼は陰気な通りの奥の小さな部屋に住み、昼間は一時間十スーの学習指導をいくつかやりに出かけ、夜は、やがて私の母

となる百姓娘をくどきに帰ってくる。[9]

念のために若干補足しておくならば、ヴァレスの父ジャン＝ルイはオーヴェルニュ地方の自作農の子として生まれたが、十九歳のときクレルモン大学区でバカロレアに合格、ル・ピュイの公立コレージュの自習監督をふり出しに、サン＝テチエンヌからナントへと転勤したのち（このころアグレガシオンにも合格している）、最後はルーアンのリセの教授となる。

「栄職」といってもその程度のものでしかなかったけれども、彼のこの階級移行は、無教養な百姓娘から小ブルジョアの妻となったヴァレスの母親に、当然のことながら深刻な文化コンプレックスを強いることになった。息子に靴打ちや平手打ちを加えつづける彼女のヒステリックな行動も、そこに起因すると考えられる。彼女は自分の出身階級である農民を嫌悪し、靴屋のファーブル家や雑貨商のヴァンサン家の人々を軽蔑して、息子が彼らの子弟と交わることを好まない。「母は私に教育を受けさせようとしている。私を自分のような田舎者にさせたくないのだ！　母の望みはジャックが紳士(un Monsieur)になることだった」[10]。ジャックは「服装にかんする拷問」[11]にかけられ、言葉の洗練を強いられ、礼儀作法の教師まであてがわれる。

しかし、短靴よりも木靴のほうが、ソテール先生の匂いよりも労働者フロリモンの匂いのほうが、髪にポマードをぬるよりも裸足で土の上を歩くほうが好きなジャック、けっして泣いたり笑ったりしない両親の重々しさよりも、ファーブル家やヴァンサン家の、粗野ではあっても屈託のない陽気さを愛するジャックにとって、こうした母親のきびしい躾は自由にたいする抑圧以外の何物でもない（ヴァレスはやがて二月革命のさい、「子供の絶対的自由」を要求

する動議を提出することになるであろう）。両親の階級移行とそれにともなう文化コンプレックスの犠牲者として、彼は深刻な自己疎外を強いられることになる。「私はいつも心にひとつの穴、大きな穴をもっていた」[12]のである。

ジョゼフ叔父のような労働者になりたいという彼の根深い志向も（『冷笑家の遺書』のなかの「私は靴直しになりたかった」という言葉を想起されたい）、こうした背景において考えなければならない。少年ヴァレスにとって、それはイデオロギー的選択である前に、ブルジョア文化を強制する「家庭の圧制」から自己を解放するための、可能な唯一の手段なのであった。

注

（1）Pléiade, pp. 129–135.
（2）ibid., p. 1117.
（3）L'Enfant (E. F. R.), pp. 19–21.
（4）Marthe Robert : Roman des origines et Origines du roman (Grasset, 1972) 岩崎・西永訳『起源の小説と小説の起源』（河出書房新社）を参照。
（5）Claude Burgelin : Éléments psychanalytiques dans "l'Enfant" *in* Colloque Jules Vallès, pp. 5–20.
（6）L'Enfant, pp. 52–53.
（7）Roger Bellet : Jules Vallès journaliste (E. F. R., 1977), p. 320.
（8）Souvenirs d'un Étudiant pauvre *in* Le Candidat des Pauvres (E. F. R.), p. 84.
（9）L'Enfant, p. 23.
（10）ibid., p. 68.
（11）ibid., p. 221.
（12）Souvenirs d'un Étudiant pauvre, p. 77.

二、「愚劣にして厭うべきコレージュ」[1]

後年、ヴァレスは学生時代を回想して、「コレージュ、そのことを考えるだけで顔が青ざめてくるのがわかる！ 私はこれらの歳月を人生でいちばん恐ろしい時期と呼びたい[2]」と述べ、また、「私は生まれてこのかた、あの暗い陰気な建物を見ていだいた恐怖に匹敵するほどの恐怖を感じたことはない[3]」とも書いている。彼がコレージュをつねにロンドン塔のような牢獄のイメージで描いていることを考えると、コレージュ生活が彼の心に残した外傷の深さがうかがえよう。

故郷ル・ピュイのマルトゥレ広場の活気、近郊ファレロールのレナージュ祭の熱狂、そしてサーカスの喧噪を愛した少年、やがては第二帝政時代に「街路〔……〕の最高の通人の一人[4]」となるべき少年ヴァレスが、「規律を犯したり、静寂を乱したり、勉強の邪魔をしたりしないように、出入りする人たちは視線を伏せ、声をおし殺し、足音をしのばせて歩いている[5]」コレージュに、まず生理的な反発を感じたであろうことは想像にかたくない。

加えて、彼の入学したコレージュが、父が下級教員として勤める当の学校であったことが、傷つきやすい少年の心に屈辱感を増幅する作用をおよぼした事実もみのがせまい。父は生徒たちからきらわれ、「犬」という渾名をつけられて、嘲笑の的になっていた。

幼心にも、〔……〕私は自分が徒刑囚の、いや、それよりもっと悪い看守の息子であることを感じていた。

〔……〕私は聞こえたようなそぶりも見せずに、父に加えられる嘲笑に耳を傾けていた。これは十歳の子供にとってつらいことだった。[6]

校長や視学官など上役にたいする父の卑屈な態度も屈辱の種であった。教授の息子と喧嘩をすれば、「自習監督の息子ふぜいが教授の子供をひどい目にあわせるなんて！」と非難される。非は明らかに相手にあるのに、規律を監視し階級制度を尊重させるという理由で、校長から叱責を受けるのはヴァントラスのほうなのだ。

学校における階級制度といえば、『子供』の第十五章に描かれているチュルファン教授こそ、その体現者というべき人物であろう。アグレガシオンを二番の成績でパスし、有力者を後楯にもっている彼は、自習監督や貧乏人を軽蔑し、給費生をいじめたり、服装の粗末な生徒を冷笑する。あるとき彼は、貧乏人がきらいだというだけの理由でジャックを殴りつけるのだが、父親はチュルファンに怒りを向けるどころか、逆に息子に背を向ける始末である。「コレージュでは強者がつねに正しい[7]」からだ。

この時代の中等教育制度にかんするアントワーヌ・プロストのつぎの記述は、こうした事実を裏づける。「しっかりと閉ざされたこの壁の内部にも階級差別は入りこんだ。金持ちと貧乏人は同じとり扱いを受けず、有力者の息子がいろんないやがらせをしても、これを抑える勇気はどの自習監督にもなかった[8]」。

ここでついでに、プロストに拠って、当時の中等学校教員（universitaires）の劣悪な条件についてみておくのも無駄ではあるまい。一般的にいって、彼らは低い身分の出で、その社会的地位も低く（教授でさえ軍の士官より低かったという）、とくに、ヴァレスの父が長らくそうであった最下位の教員、自習監督の場合は惨めであった。一般に

寄泊制度をとっていた当時のコレージュにおける彼らの役割の重要さにもかかわらず、彼らの前途に希望はなく、自翌監督のまま老年を迎える教師も多かったし、解雇も非常に頻繁だったらしい。プロストの表現を借りれば、彼らは「中等学校のプロレタリアート」[9]を構成していたのである。社会的上昇を夢みて教員生活に入っても、小ブルジョアジーや商人や下級官吏の子弟たちにとって社会環境が変わるわけではなく、ブルジョアジーの娘との結婚はきわめてまれで、彼らは結婚によって再び出身階級に戻るほかなかった。しかも、地域社会は彼らを迎え入れることをせず、逆に彼らにきびしい監視の目を向けた。彼らは教員にふさわしい謹厳な生活を期待され、カフェへの出入りや街頭での喫煙すら冷たい目でみられたという。地域社会に根をおろすことのできない彼らは、いくらかでもましな待遇を求めて転勤することが多かった。ヴァレスの父親の再三の転勤にも、こうした背景があったわけである。

『大学入学資格者』のなかで、ジャック・ヴァントラスは死んだ父親にたいして、

私は十二歳で自殺しようとしたことを思い出す。コレージュが私にはあまりにも陰気で意地悪だったからだ。〔……〕あなたは私の苦しみに気がついてくれなかった！あなたはそれが子供らしい渋面だとばかり思いこんで、私に教師たちの暴行を受けさせ、この徒刑場にとどまらせた。――なるほど、それは私への愛からであり、私のためを思ってのことではあった。というのも、あなたは自分の息子が学者となり一人前の男となって、そこから出るだろうと思ったからだ。私が学者になったのはもっぱら苦悩のなかでであり、私が一人前の男になったのは、子供のときから――あなたにたいしてさえ――反抗したからなのだ。

と怨恨を吐露する一方で、父親自身が当時の学校制度の犠牲者であったことを認め、同情の涙に暮れるのである。

永久に閉じてしまったこのまなこの下に、もう涙も枯れはてたこの目のくぼみのなかに、どれほどの苦悩が隠されていることか！　私には、彼を辱め脅迫した教授服の死刑執行人どもの、とどめの一撃が感じられる。〔……〕彼が怒りをおぼえ、その怒りを私にぶっつけたことが理解できる。……私は自分が苦しんだことを嘆いている！だが、そうじゃない、彼こそが犠牲者であり生贄なのだ！(10)

以上がヴァレスにとってコレージュの「厭うべき」側面であったとすれば、いまひとつの「愚劣な」側面とはいかなるものであろうか。それは、『子供』の第二十章「わが古典学」で戯画的に描かれているような、ギリシア・ローマの古典を中心とした教育内容にかんするものである。高等師範学校の出身でピンダロスを翻訳している若い教師が、ある日、「ギリシア人へのテミストクレスの演説について」というテーマをあたえ、「テミストクレスの立場に立って考えるのだ」と助言する。だがジャックは、まさにこの点に疑問をいだかざるをえないのである。教師はみんな、だれそれの立場に立って考えなければならないと教えるが、はたして十四歳の少年に、たとえば鼻をそがれたゾピロスや拳を焼いたスカイウォラの身になって考えることができるだろうか。しかも、登場する人物はいつも将軍であり王であり女王なのだ。ハンニバルやカラカラやトルクアトゥスの立場からものをいえといっても、それは無理というものではなかろうか。

いつでも彼らとともに、ジャニコロの丘のそばにいなければならない。しかし、私は自分がラテン人だと想像することはできない。〔……〕教室を出ても、ウィテリウス皇帝の便所に入るわけではない。私はギリシアなどへ行ったこともない！　私はギリシアの将軍ミルティアデスの栄誉など求めて悩んだりはしない。現実の私の悩みの種は玉ねぎなのだ。[11]

ここにきわめて素朴なかたちで表明されている古典教育への疑問は、やがて、たとえば『街』(La Rue, 1867) のなかの、つぎのような鋭い批判へと発展していく。そこでヴァレスは、「われわれはまだ鼻に指を突っこんでいた時期に制服と制帽を着せられて、〔……〕王政時代にはコレージュと呼ばれ、諸革命後はリセと呼ばれている場所に閉じこめられた。そこでは、フランス語を話し生計を立てる道を教えるかわりに、われわれにギリシア語の語源をさぐらせたり、ラテン語の動詞を活用させたりした。〔……〕教わるのはいつも《古きホメロス》であり、《調べよきウェルギリウス》であった。生徒たちは何ひとつ知らずに十九歳でそこを出て、自分の教育を始め、食っていくために体操か無神論の家庭教師となるか、教師またはジャーナリストにならざるをえない」[12]と述べ、「リセの教師たちによって教えられるローマ的世界は、新しい世界になんというひどい、むごたらしい、悲しむべき影響をおよぼしたことか！〔……〕われわれの不幸の半ば、われわれの災厄の最大のものは、修辞学の第一人者たちが、古典教育によって刻みこまれた襞をずっと保ちつづけていることに由来する」[13]とまで断定している。

こうして、古典中心の中等教育の結果もたらされるのは、一方で、ヴァレス自身そのひとりであったところの、貧困と飢餓にさらされる大学入学資格者の拡大再生産であり、他方、九三年の革命家たちのような、英雄的過去の相

倣者の「あの権威主義的でジャコバン的な栄光のむなしさ」[14]である。（プルードンとの対比で表明されているこうしたヴァレスの反ジャコバン主義は、彼の社会主義思想を考えるうえできわめて興味深い問題であるが、ここで立ち入る余裕はない。いずれ別の機会に考えてみたい。）

心ならずもカーンのコレージュの自習監督となったヴァレスが、大胆にも生徒たちにコレージュ教育の不毛性を説いて免職になるのも[15]、ジャーナリスト・ヴァレスが世の親たちに向かって、子弟には正字法、製図、力学、物理学あるいは化学を学習させるよう勧めるのも[16]、彼自身の苦い体験に根ざしたラディカルなコレージュ批判に基づいているのである。

注

(1) 《le collège stupide et abhorré》, Souvenirs d'un Étudiant pauvre, p. 95.
(2) Pléiade, p. 1025.
(3) Le Candidat des Pauvres, p. 347.
(4) S・クラカウアー『天国と地獄――ジャック・オッフェンバックと同時代のパリ』（平井正訳、せりか書房）、三三ページ。
(5) L'Enfant, p. 41.
(6) ibid., p. 42.
(7) Pléiade, p. 460.
(8) Antoine Prost : Histoire de l'enseignement en France, 1800-1967 (Armand Collin, 1968), p. 50.
(9) ibid., p. 71.
(10) Le Bachelier (E. F. R.), p. 437.
(11) L'Enfant, p. 255.

(12) Pléiade, p. 830.
(13) ibid., p. 816.
(14) ibid., p. 818.
(15) L'Insurgé (E. F. R.), p. 28. および Le Candidat des Pauvres, p. 191.
(16) Pléiade, p. 986.

三、六月事件

二月革命が起こったとき、ヴァレスは十六歳で、ナント王立コレージュの修辞学級の生徒であった。当時の彼の行動について、『ジュニユスの手紙』はごく簡単につぎのように書いている。

四八年がやってきた！ コレージュはあげて進歩派に与した(pour le mouvement)！ われわれは通学生のクラブを結成し、執行部を選出した。議長は未来の技師であり、副議長は、先年おおいに話題になった未来のジャーナリストであった。私は書記として数票を獲得し、これを利用していくつかの動議を提出し、火器の訓練をすこし、そして制服づくりをおおいに推進した。――私は新思想の勝利のなかに、もう旧世代の古着を着せられずにすむ手段をみていたのである。(1)

文中のクラブは「ブルターニュ・ヴァンデ共和主義青年クラブ」(Club de la Jeunesse républicaine de Bretagne et de Vendée) といい、また「未来のジャーナリスト」とは、その後もヴァレスが政治的行動をともにすること

とになるシャルル＝ルイ・シャサン（三部作中のマトゥサン）をさす。なお、「いくつかの動議」のなかにバカロレアの廃止[2]と、前にちょっと触れた「子供の絶対的自由」の要求が含まれていたこともつけ加えておこう。

ここでは六月事件のことはまったく語られていないが、『街』のなかの「隷属」（La Servitude）と題する章に、六月事件を含む当時のヴァレスの行動の、より詳細な記述が見出せる。[3]

二月二十四日から二十五日にかけての朝、反乱を起こしたパリが共和制を宣言した翌日、私はナントで、国王広場――翌日は国民広場、十二年後には皇帝広場と呼ばれることになる！――になだれこむ民衆の波について行った。私は、靴の紐もろくに結ばず指をインキだらけにした、うす汚いコレージュの生徒だったが、同時にテームに強い生徒（fort en thème）でもあって、ラテン詩人たちのなかで、自由という言葉が熱っぽく輝くすべての詩句を知っていた。

青年らしい心の昂揚を伝える冒頭の文章である。ここには、『ジュニユスの手紙』に記されている事実のほかに、「この共和制は社会的なものになるだろう」と叫ぶマンジャンなる人物[4]の演説、「ローマ的美徳の賞賛のなかで育てられた〔……〕われわれがひたすら求めていたことは、前線へ送られること、戦いと死が待っていることだった」という当時のヒロイズムにたいする反省（これは彼の反ジャコバン主義と関係がある）、「自由の木」が植えられ、「国王の」という文字が削りとられるのをみたときの感激、学校の代表として派遣された会合で「勇壮な態度と前代未聞の私の声楽」をもって急進的な発言をして注目を集めたこと、臨時政府のなまぬるい姿勢、とりわけ選挙にかんするルドリュ＝ロランの回状（有権者は二十一歳以上と定められていた）にたいする強い不満、ブランキとプルードンへの

傾倒、などが語られている。

なかでも、未来の社会主義者ヴァレスが、前述のマンジャンの演説にかんして、「私は、群衆が熱狂や怒りに感染して≪パンテオンへ！≫とか≪絞刑にしろ！≫とか叫ぶように、賛成と叫んだ。しかし私には、この形容詞の意味、共和制に付されたこの社会的という形容詞が何を意味するのかわからなかった」と率直に書いているのが注意をひく。つまり、この時点ではヴァレスはまだ社会主義思想にはまったく無縁だったわけであるが、やがて主にプルードンをつうじて社会共和制の意味を理解するにいたったヴァレスは、六月の蜂起者としてプチ＝ポン橋のバリケードで四発の弾丸を浴びて倒れたマンジャンの死を悼んで、深い憤りをこめて「六月、不吉な事件！　陰惨な戦い！」と書くまでに成長する。社会共和制がブルジョア共和制によって圧殺された六月事件は、おそらくヴァレスの目にも「醜悪な革命、いとうべき革命」[5]と映ったにちがいない。

六月事件のもつ社会史的な重要性について、ジャン・ロムはつぎのように書いている。「一般に、核心的な事件と考えられているのは二月である。その証拠に、革命という用語がためらいなく二月の事件につけられている。六月の事件については、人々は「蜂起」とかあるいは単に「事件」という、――あたかもそれが、おそらく重大なでき事であるとはいえ、結局、ルイ＝フィリップの失脚よりも重大ではないことであるかのように。われわれの眼からみれば、六月は、政治的であるよりもはるかに社会的な性格をもつ抗争であり、かつ階級間の同盟の激変を示しているという点で二重の興味の対象である。中産諸階級は、二月には、パリの人民とともにいる。六月にはそれに対抗している」[6]。

二月に労働者階級と同盟して大ブルジョアジーに立ち向かった中産諸階級が、政治革命で満足し、臨時政府が成立した時点で革命は終了したと考えたのにたいし、社会革命によってそれを完成させることを望んだ労働者階級は、六

月には、大ブルジョアジーと中産諸階級、つまりすべてのブルジョアジーを敵にまわさなければならなかった。そして、このとき初めて彼らのなかにプロレタリア意識が生まれる。再びロムの表現を借りれば、「もし、われわれが考えるように、一階級の孤立がその特殊性の必然的要素であり、またその特殊性が階級意識の誕生に必要な一要素を構成するならば、われわれは、一八四八年六月、はじめて、労働者階級のなかに、階級意識――それはプロレタリアートの名をはじめてかれらに与えることを可能ならしめる――が確立された、とのべる権利を有している」[7]。

ヴァレスが初めてパリに出るのはこの年の九月になってからだから、パリにおける六月の惨劇はもちろん目撃していない。だが、この事件にたいする彼の異常なまでの関心は、そうした歴史の新しい局面の開始を、彼が鋭敏に感じとっていたことの証左であろう。彼は六月の蜂起者たちから執拗に情報を集め、彼らの歴史を書こうと企てる[8]。結局この計画そのものは実現しなかったけれども、たとえば『冷笑家の遺書』の主人公エルネスト・ピトゥーは、パリで二月革命につづいて六月暴動にも参加し、銃殺された父親の血を目からしたたらせている男や、流刑者の行列や、その行列のなかに血まなこで肉親をさがしまわる人々の姿をみた。また、戯曲『パリ・コミューン』はまさしく六月の敗北をもって開幕するのである。主人公である鍛冶屋のピエール・ボードゥアンは二十八歳のとき蜂起に参加、流刑に処せられたのち一八五六年に帰国して、やがてパリ・コミューンの闘士となっていく。……六月事件の衝撃は、若きヴァレスの心に癒しがたい「政治的外傷」[9]を残すとともに、家庭とコレージュの圧制のもとに鬱積していた彼の反抗のエネルギーに点火し、これに決定的ともいえる方向をあたえる契機となったのである。

私は大革命史のなかへ入りこんでいった。

私の前に一冊の本がいま開かれたのだ。そのページには貧困と飢えの問題がとり扱われている。私の目の前をさまざまな顔が通りすぎる。私の心にジョゼフ叔父やシャドナス叔父の顔が浮かぶ。コンパスを武器として用いた指物師たち、熊手の先端に血をしたたらせている農夫たちの顔が浮かんでくる。

〔……〕

そして、いやいやながら学者になった私の血管のなかで、農民の子としての、労働者の甥としての血潮が躍動する！

〔……〕

私は死者の世界から生者の世界へ、一気にとびこんだのだ。(10)

こうして彼は、「六月の敗北者たち」＝プロレタリアートの側に立つことを選択することによって、ついに自己解放をなしとげる。ここにいたる若きヴァレスの苦悩と反抗の歴史は、出身階級から切断されて疎外状態におかれていた自己の回復をめざす苦闘、アイデンティティ探求の道程にほかならなかったといえよう。

注

(1) Pléiade, p. 133.

(2) バカロレアの廃止がパリでもスローガンのひとつになっていたことは、フローベール『感情教育』第三部のつぎの記述からもうかがえる（Œuvres complètes, Club de L'Honnête Homme, t. 3, p. 302）。

「アカデミーを廃せ！　学士院をよせ！」「伝道会はいらん！」「バカロレアもよせ！」「学位なんかやめっちまえ！」

（岩波文庫、下巻、一一一ページ）

(3) Pléiade, pp. 808–812.

(4) ロジェ・ベレによれば、この人物はエヴァリスト・マンジャンといい、後述するように彼自身は六月事件で死ぬが、彼の父ヴィクトル・マンジャンは、一八六七年に死ぬまで一貫して共和主義の論陣をはりつづけた著名なジャーナリストだったという（Pléiade, p. 1579）。

(5) マルクス『フランスにおける階級闘争』、国民文庫、六一ページ。

(6) ジャン・ロム『権力の座についた大ブルジョアジー』（木崎喜代治訳、岩波書店）、一七二ページ。

(7) 同書、二七一―二七二ページ。

(8) L'Insurgé (E. F. R.), p. 100.

(9) Roger Bellet : Du journal au roman, Trois images vallésiennes d'une enfance *in* Colloque Jules Vallès, p. 79.

(10) L'Enfant, pp. 310–312.

おわりに

以上、両親との葛藤、コレージュ生活、および六月事件という三つの主要なモメントを手がかりに、若きヴァレスにおける≪反抗≫形成の過程をたどってきた。家庭および学校という小社会の圧制に虐げられて育ったこの反抗児は、六月事件によって政治的にめざめ、被抑圧者の立場から、いよいよ社会的圧制に立ち向かうことになる。

しかし、立ちあがったばかりの彼を、たちまちルイ=ナポレオンのクーデタが打ちのめす。この「六月の敗北者たち」の味方は、こんどは自ら「十二月二日の敗北者」とならなければならない。しかも、このときは「六月の敗北者

たち」が行動を起こそうとしなかっただけに、彼の挫折感はきわめて深刻であった[1]が、あらゆる圧制と権威にたいする《反抗》という基本姿勢が崩れることはなかった。彼は第二帝政時代を一貫して「不服従者」(insoumis)として生き、ヴォルテール的イロニーを武器に反ボナパルチスムの論陣をはる一方、「産業帝政」の歓喜と繁栄からとり残された底辺の民衆の生活を、深い共感と愛情をこめて描きつづける。そして、やがてパリ・コミューンが、こうしたヴァレスの《反抗》に最良の場を提供することになるであろう。

注

(1) アラゴンがすぐれてスタンダール的なテクストとして注目した未完の『十二月二日秘史』(Un Chapitre inédit de l'Histoire du Deux Décembre, 1868——Pléiade, pp. 1066—1079)は、クーデタ前後のヴァレスの行動と心情をなまなましく伝えている。